



女性歯科医の活躍が 歯科界の発展を左右

育児時間の確保が困難

歯科医師国家試験の合格者の4割を女性が占めるなど、歯科界で女性歯科医の役割が比重を増している。一方で、仕事と家庭生活のバランスに困難を抱える実態も報告されている。日本小児歯科学会で14年間理事を務め、日本歯科医師会の「女性歯科医師の活躍検討ワーキンググループ(WG)」のメンバーや東京都女性歯科医師の会を発足した高野博子先生(東京都開業)と、協会理事で「女性医師・歯科医師の会」の世話人の玉川尚美先生が語り合った。

玉川 WGがまとめた報告書(2016年)では、女性歯科医師が妊娠・出産と育児(育児時間の確保)などで女性ならではの困難を経験していることを指摘していますね。私は夫と歯科医院を開業していますが、私自身も出産・子育てを機に診療の一線から退いた時期があり、実感するものです。高野先生は開業医として、育児と診療はどのように両立されたのでしょうか。

高野 「子育て時間の確保」の困難は働く女性の多くが直面する問題です。私の開業のきっかけは当時勤務していた歯科大学に産産を機に居続

けられなくなったからでもありません。当時は、共働き世帯が少ない時代でした。1人目の出産のとき職場からは当然やめようと思われていました。2人目を妊娠した時、上司からは「出産したらやめるよね」と当然のように言われました。

玉川 今なら「マタハラ」ですね。

高野 退職の送別会の際に私は、「女性がほとんどの小児歯科医局なのに女性歯科医師が働き続けられる環境を整える気がないなら、これからの小児歯科に未来はない」と悔しい思いをぶつけたことを今も覚えています。

1人目が2歳、2人目はまだ8カ月でしたが、内科医だった父の診療所の2階に開業しました。

たかの・ひろこ 1954年生まれ。東京歯科大学卒、同大学院に進んで博士号を取得。大学に在籍しながら1人目の娘を出産して復帰したが、2人目の出産を間近にして退職。1987年に「高野歯科クリニック」を東京都葛飾区に開設。文京区にも歯科を併設する「母子坂くつろぎクリニック」を開設している。現在、東京女性歯科医師会会長、小児歯科学会理事を長年務める。好きな言葉は、偏らないことを意味する「中庸」。



写真提供：東京ドクターズ
日本小児歯科学会元副理事長
高野博子氏(東京都開業)



大阪歯科保険医協会理事
玉川尚美氏

たまがわ・なおみ 1961年生まれ。大阪歯科大学卒、大阪市内「玉川歯科医院」勤務。大阪府歯科保険医協会理事、同会女性医師歯科医師の会世話人、同会組織部部長、全国保険医団体連合会では組織部員を務める。

玉川 乳幼児を育てながら開業を決意されたパワーがすごいですね。

高野 母の影響かもしれませんね。母からは「女性であっても自立できるように」と教えられていたことが、生き方の根底にあったのでしょ。うね。男女問わず仕事をするのは当然と思っていましたし、仕事・家事・育児のどれにも偏らない生き方をしたいという思いがありました。

玉川 私は夫婦で開業しましたが、出産を機に子育てに比重を置き、診療の一線を離れました。育児がひと段落してから、パート勤務で診療もしてきましたが、一線が続けられなかったことでは、悔いが残りませんでした。学会に所属し専門性を高めることもありませんでした。

高野 子どもと長時間過ごすことはできなかったかもしれませんが、一緒に過ごせる時間は大切にしたいと思いました。子どもの日曜日の運動会が雨で延期になった時は、患者さんには事前に了解を得ておいて月曜日を休診にすることもありました。スタッフや患者さんにも理解してもらいながら、やりくりしたように思います。

玉川 制度や支援も必要ですが女性歯科医がキャリアイメージを持ちながら、モチベーションを維持することが重要な気がします。

高野 その通りだと思います。ロールモデルがあると励まされます。小児歯科学会大会では「202030男女共同参画」を目指して各界で活躍中の女性にロールモデルとなるような講演会をお願いしてきました。女性歯科医に限りませんが、専門性を持つことは、スキルアップを目指して継続就業の動機につながると思います。私は、小児歯科医として、人に負けないプライドがあります。働き続けなければスキルは上がりません。

玉川 小児歯科学会では学会大会での託児所の設置や、人材バンク事業などの取り組みにも力をいれられていますね。

高野 男性に失礼かもしれませんが、女性には優秀な学生や歯科医がとて多いいのに、「活躍」しきれないことに「もったいなさ」を感じています。私の娘たちも医師の道を選びました。長女は3歳と1歳の子ともがいて、次女も子どもが生まれたばかりです。次世代のためにも声を上げていきたいと思えます。本格的な人材バンク設立は、マッチングが難しいので日本歯科医師会で取り組んでほしいですね。

近年、国立大学歯学部では女子学生の割合が半数を超えているところがほとんどです。小児歯科学会では6割が女性です。2030年代には歯科医師全体でも女性の方が多くなっているかもしれません。日本は女性が政治・経済活動に参加し、意思決定に関与しているかを示す「ジェンダーエンパワーメント指数」が低く歯科界も同じです。しかし、ノルウェー、スウェーデンなど北欧や東南アジアでは、歯科に関する様々な学会で女性が会長職についています。各国の歯科界で女性が活躍していることを思えば、日本でもっと女性歯科医が活躍できるのは間違いありません。これからの日本の歯科界の発展は女性歯科医師が活躍できる環境を整えられるかにかかっていると思います。

歯界

現在放送中のNHK大河ドラマ「青天を衝け」では、「日本資本主義の父」と言われている渋沢栄一が、幕末から明治にかけて激動の時代を生きた生涯をドラマチックに描いている。

ドラマの中で渋沢栄一は日本経済だけでなく、慈善事業にも尽力した、人間味溢れる実直な人物として描かれている。さほど古い時代の話ではないため、時系列などが史実に基づいている。

しかし、歴史というものは、語る者の立場や視点が変わると全く違うものになってしまうこともある。

大日本帝国に併合される前の近代の韓国の最初の紙幣には渋沢栄一の肖像が描かれていたことは知られていない。韓国側からすれば経済侵略の象徴であり、負の歴史なのである。

渋沢栄一を新紙幣の図柄とすることは是非ともかく、その様な視点も理解する必要があるのではないだろうか。(N)

年末年始のお知らせ

協会の年末年始の業務と本紙の発行は次の通りです。
【休務】12/29~1/5
【新聞】2021年12/25付、2022年1/15付は休刊。